九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明清天主教における十誡 ： 「愛天主・愛人」の概念を通して

柴田, 篤
九州大学

https://doi.org/10.15017/18161

出版情報：中国哲学論集. 22, pp.35-54, 1996-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

明清天主教における十誡

――「愛天主・愛人」の概念を通して――

柴田　篤

一

マテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、一五五二～一六一〇）が中国文で著した『天主実義』（一六〇三年刊）は、その報告書の中では「カテキズモ」（Catechismo、教理問答書）と呼ばれている。別稿で論述したように、『天主実義』は本来の意味での教理全体を網羅するものではなく、リッチは同じ時期に『天主教要』（Dottrina Christiana、キリスト教の教義）なる書を別に編纂している。この書は、使徒信条・祈禱文・十誡・秘蹟など教理の全体を解説した文章であり、洗礼志願者のために用いられた。[1] 言うまでもなく、中国におけるリッチらイエズス会士の目的は中国人をカトリック（天主教）に改宗させることにあり、そのための活動の中心は教理の伝達にあった。本稿では、彼らが伝えた教理のうち特に「十誡（じっかい）」を取り上げ、明末清初の天主教の伝道とその受容過程においてそれが果たした役割と意味について考察していくことにする。[2]

ところで、中国における十誡受容の問題は、既に後藤基巳氏の「十誡の中国的展開――中国キリスト教思想史に関する一考察――」において論述されている。[3] この論考では、唐代の景教、明末清初の天主教、清末の太平天国のそれぞれの時期において十誡がどのように紹介、受容されたか、またそこにおいてどのような思想的摩擦や葛藤が展開されたかという問題が詳細に分析されている。その際、後藤氏は「キリスト教倫理と中国的倫理の対決、およびキリスト教

に対する中国的理解の型の問題」（六十七頁）をそこに捉えようとし、次のように述べる。

中国キリスト教思想史は、まさにその信仰に固有なる唯一神観と儒教的なる忠孝倫理との対決を中心とし、また「十誡の中国的展開」というここでの具体的テーマに即して言えば、「我を唯一の天主として礼拝すべし」というキリスト教的至上命令と「汝父母を敬うべし」に重点をおく儒教的なそれとのかかわりかたを中心として展開するということができるであろう。（六十九頁）

このような問題意識に立って後藤氏は、明末清初のカトリック伝道における十誡の問題に関しても、「天主を絶対とするキリスト教倫理」と「君父を最高の権威と観ずる中国倫理」との対立（七十八頁）をそこに見ようとする。たとえば、第一誡の「唯一にして万有の上なる天主の欽崇」において、「天主の権威と君父の権威の対決」（七十八頁）を見る後藤氏は、「しかるにこの切実な問題に対する中国人信徒の側の反応はむしろ精細を欠く。このことは恐らく彼らのキリスト教理解のしかたが総じて楽観的主観主義に偏し、キリスト教倫理をひたすら儒教倫理との親近性において評価しようとする意識の強かったことと関係するであろう」と述べ、徐光啓を引いた上で、「このような見解のみを以てしては、天主に帰一するキリスト教の信仰に対する正確な理解、ことに天主の権威と君父の権威の対決をその緊張関係において実践的に把握しようとする切実な反省が生れ得るか否かは疑問である」と結論付けている。（同上）だが、中国人奉教者の天主教受容、特に十誡受容の問題を捉えるに当って、このような対立・対決の構図を前提とする視点は果たして妥当なものであろうか。そもそも十誡全体がどのようなものとして移入・紹介されたのか、またどのようなものとして受容されたのか、そこにどのような意味が存在するのか、といったことを先ず見ておく必要があるのではないだろうか。そのために本稿では、明末清初の天主教において十誡全体がどのように伝達され、受容されたかということを考察するところから始めていきたい。

二

明末清初において十誡の注解がなされている主要な書物を次に列挙する。

(1) 羅明堅『天主実録』一五八四刊
(2) 王豊肅『天主教要解略』一六一五序（『天主十誡解略』）
(3) 艾儒略『滌罪正規』
(4) 陽瑪諾『天主聖教十誡直詮』一六四二刊
(5) 潘国光『天主十誡勧論聖蹟』一六五四刊
(6) 南懐仁『教要序論』一六七〇刊

以上の書物の中で十誡がどのように論じられているかを見ていきたいが、その前に十誡の内容・構成とその表記について前提となることを見ておくことにする。

十誡は一言で言えば、ユダヤ民族（イスラエルの民と呼ばれる）が出エジプトの体験の後、シナイ山においてその指導者モーセを通して、彼らが信仰するヤーウェの神から授けられた十箇条の掟のことである。十誡はこれに続く神とイスラエルの民との間で結ばれた諸々の契約（律法）の基礎をなすもので、ユダヤ教、キリスト教の信仰的・倫理的規範の基本となるものである。『旧約聖書』の「出エジプト記」二十章一～十七節に次のようにある。(4)

1神はこれらすべての言葉を告げられた。2「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。3あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。4あなたはいかなる像も造ってはならない。（中略）5あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。（中略）
67 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。（中略）8安息日を心に留め、これを聖別せよ。12あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。13殺してはならない。14姦淫してはならない。15盗んではならない。16隣人に関して偽証してはならない。17隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。（中略）」

これと同様の記事は、『旧約聖書』の「申命記」五章六～二十一節にも見える。この掟は二枚の石の板に記されて

与えられるが（「出エジプト記」三十一章十八節）、金の牡牛の鋳像を造り拝んでいたイスラエルの民に激怒したモーセが投げつけて砕いたので（同三十二章十九節）、その後再び神から与えられる（同三十四章一～四節）。モーセはこの「十の戒めからなる契約の言葉」（同二十八節）が記された「二枚の掟の板」（同二十九節）を携えてシナイ山を下り、イスラエルの共同体の人々にこれを告げ報せる。これがいわゆる「十誡」である。このユダヤ民族の律法の根本である十誡はキリスト教においても重んじられていくが、十誡の各誡にどの言葉を当てるかということで二つの見解に分かれる。相違点を上記の「出エジプト記」二十章に即して言えば次のようである。ユダヤ教及びアウグスティヌスより前のカトリック教父、ギリシア正教会、プロテスタント諸派（ルーテル派を除く）においては、二～六節を二分し、第一誡を「我のほか何物をも神としてはならない」、第二誡を「偶像を造りこれを拝んではならない」とし、十七節を第十誡「貪ってはならない」に当てる。これに対して、アウグスティヌス以後のカトリック教会及びルーテル派は、二～六節を一括して第一誡とし、以下前者に比べ一誡づつ繰り上がるが、十七節を二分して第九誡を「他人の妻を貪ってはならない」、第十誡を「他人の物を貪ってはならない」とする。本稿で取り上げる明清期の天主教はもちろん後者によっている。後述のように、前掲の(1)と(2)以下の書物とでは十誡の訳文に相違が見られるが、(4)陽瑪諾『天主聖教十誡直詮』の表記でほぼ固定化したと思われるので次に掲げる。[5]

一　欽崇一天主万有之上（一なる天主を万有の上に欽崇せよ）
二　毋呼天主聖名以発虚誓（天主の聖名（みな）を呼びて以て虚誓を発する毋れ）
三　守瞻礼之日（瞻礼の日を守れ）
四　孝敬父母（父母を孝敬せよ）
五　毋殺人（人を殺す毋れ）
六　毋行邪淫（邪淫を行なう毋れ）
七　毋偸盗（偸盗する毋れ）
八　毋妄證（妄證する毋れ）

九　毋願他人妻（他人の妻を願う母れ）
十　毋貪他人財物（他人の財物を貪る母れ）

では、明末清初においてこの十誡は全体としてどのように伝えられていったのであろうか。

三

リッチは入華の翌年（一五八三）、ミケーレ・ルッジェリ（中国名は羅明堅、一五四三〜一六〇七）と共に広東省肇慶で土地を与えられ、そこに最初の住院を建立する。[6] 片側二部屋、反対側二部屋の中央に広間を作り、その中心に祭壇を置いて、聖堂風に整える。祭壇に置いた聖母子の画像（のちにキリストの画像に替える）に向かって、「神父（リッチ）たちを訪ねてきた官吏や他の文人や民衆、それに偶像教（仏教）の僧侶たちまで礼拝する」状況になる。そうした中、神父たちの教義について尋ねにくる人も多かったので、リッチたちは「十戒の十の掟」を中国語に翻訳して印刷させ、人々に配る。パスクワーレ・M・デリーア師によれば、「祖伝天主十誡」がそれである。[7] それには十誡本文のあとに、「右誡十条は、古時、天主親（みずか）ら書き降して、世に普く遵守せしむるに係る。順う者は則ち魂、天堂に升り福を受け、逆う者は則ち地獄に堕ち刑を加えらる」とある。この「十誡」を読んだ者は「それが道理にかない自然法に即したものであると知って、それを守ってみようと言った」と、リッチは記している。[8] その後、文人たちは印刷した「十誡」に書いてある以上のことを強く知りたがったので、リッチらは『公教要理』の中国語訳を作ることになる。かくしてルッジェリの手になる『天主実録』（一五八四刊）が編まれ、やがてリッチによって『天主教要』、『天主実義』（一六〇三刊）が著されることになる。このように見てくると、詳細な天主教の教理が説かれる前に、祭壇や画像に引き付けられた中国人たちに対して先ず簡約な十誡本文が示され、これに興味を覚えた人々が更に詳しい教理の内容を知ろうとしたということが解る。十誡は天主教の教理を端的に示すものとして中国人に伝えられ、リッチ側の見解ではあるが、「道理にかなったもの」として受け取られたのである。

これを受けて、ルッジェリ（羅明堅）の『天主実録』ではさらに詳しく十誡の内容が説明される。[9] 十誡はこの書の十二章から十四章にかけて述べられている。基本的に「祖伝天主十誡」の訳語を継承しており、後に定着化する表現と異なっている条目が多い。特に、第一誡は「誠心もて一位の天主を奉敬せんことを要し、別等の神像を祭拝すべからず」と説き、偶像崇拝の禁を明文化している。また第四誡は「当に親長を孝敬すべし」と説き、後の「父母を孝敬せよ」と異なり、年長者（長上）に対する敬意を表面に出している点が特徴的である。この書では、十誡全体について次のように述べている。

前の三条には万物にも増して天主を愛するということが、後の七条には自分のように他人を愛するということが記され、これを十誡と称するのである。この十誡を守る人は自然に天主の寵愛を受けることができるのである。[10]

このように前三誡は「愛天主」を、後七誡は「愛人如己」を説くということが簡明に述べられている。次に『天主実録』を承けたリッチの『天主教要』を取り上げるべきだが、この書は今日見ることはできない。アルフォンソ・ヴァニョーニ（中国名は王豊肅、一六二四より高一志、一五六六～一六四〇）の『天主教要解略』（上下二巻、一六一五年序）が、リッチの原本を継承し、完成させたものと推測されている。[11] その巻上に『天主十誡解略』が収められている。ルッジェリの『天主実録』においては、十誡各条の説明はきわめて簡略であったが、『天主十誡解略』では各誡ごとにより詳しい説明がなされている。最初に十誡本文が掲げられた後に、次のように記されている。

右十誡、総帰二者而已。愛慕天主万物之上、与夫愛人如己。此在昔天主降諭令普世遵守。順者升天堂受福、逆者堕地獄加刑。

後半は先に見た「祖伝天主十誡」と同じ内容であるが、前半では十誡が「天主を万物の上に愛慕する」と「人を愛すること己の如くする」の二者に帰着することが真先に説かれている。更に十誡全体について次のように注釈がなされている。

一つの石には前の三誡が刻まれており、心と言葉と行ないの三つによって天主を愛敬するように教えている。もう一つの石には後の七誡が刻まれており、心と言葉と行ないで人々と和睦し、その身体と名誉と財産などを害なわないことによって天主を愛する心を推し広げて人を愛するように教えている。思うに天主の教えは仁を根本と

するもので、この二つの愛を行なうことによってのみ尽くされるのである。[12]

ここで注目すべきことは、前三誡と後七誡との関係に言及している点である。前三誡の「天主を愛する心」を推し広げることによって、後七誡の「人を愛する」ことがなされるというのである。またもう一つは、天主の教えが「仁」を根本とし、「天主を愛する」と「人を愛する」という「二つの愛」を含むものであると説かれる点である。この「仁」の問題については後述する。

次にジュリオ・アレーニ（中国名は艾儒略、一五八二～一六四九）の『滌罪正規』（四巻）に十誡の解説が見られる。[13] この書は、教理全体の中で言えば七つの「秘蹟」の一つ「解罪」（懺悔と赦罪）を中心に、罪過の自覚、悔い改めと赦しについて解説したものである。「省察」「痛悔」「改過」「告解」「補贖」に分かれるが、巻一「省察」（自己の罪過の自覚）の中で次のように述べている。

そもそも人の〔犯す〕罪は多いが、すべては思いと言葉と行ないと怠りによって天主の十誡に背くことである。十誡は天主の命令であり、万理の根幹であり、人が共に歩む道である。自らの過ちを改めようと思うならば、必ずこの十誡について省察を行なってこそ可能なのである。[14]

このようにあらゆる行為の根本的規範として十誡が位置付けられるが、続いてこの十誡に背く罪について各条ごとに具体的な例を挙げている。例えば、第一誡「欽崇一天主万有之上」では「愛に背く罪」として、「天主を愛する以上に、世の中の一切の事物を愛する者は罪がある」[15] とある。また第四誡「孝敬父母」では、「父母に過失があるのに、あえて勧め導こうとしない者は罪がある」[16] とあり、第六誡「毋行邪淫」では、一夫一婦が「正道」であり、「娶妾」を厳に戒めている。このように『滌罪正規』は十誡の内容を具体的な行為のあり方を通して説いている。

次に、エマニュエル・ディアズ（中国名は陽瑪諾、一五七四～一六五九）の『天主聖教十誡直詮』（一六四二）を見てみたい。この書は従来のものに比べて質量ともに勝るもので、第五誡は十八丁、第一誡は二十五丁にも及ぶ。冒頭には「上巻は前の三誡、すなわち上は天主を愛するということを論じ、下巻は後の七誡、すなわち下は世人を愛するということを論じている」とある。各誡ともそれぞれの内容や意義が詳しく論述され、必要に応じて聖書の文章やアウグスティヌス、トマス・アクィナスといった聖人の言葉が援用されている。また、第五誡「毋殺人」では、「輪

廻〔の説〕は物の理を窮めていない」「輪廻〔の説〕は人倫を滅ぼす」といった項目を立てて、仏教輪廻説に対する批判が展開されてもいる。

続いて作られたのがフランチェスコ・ブランカーティ（中国名は潘国光、一六〇七～一六七一）の『天主十誡勧論聖蹟』（一六五四刊）であるが、『天主聖教十誡直詮』より更に大部である。各誡ごとに問答体も交えてその意義を論じた「勧論」と、例話として聖人や聖女などの事績を述べた「聖蹟」とによってなっている。第四誡「孝敬父母」の「勧論」では次のように述べている。

天主は十誡を世の中に降して、上下内外の礼を定められた。上には天主がいて敬すべきで、下には人民がいて愛すべきである、と。上下が正しい礼によって遇すれば、その働きは成就し、徳は完全になる。第一、第二、第三の誡は天主を崇敬することである。（中略）後の七誡は他者を自己のように愛することであり、他者の中では父母が最も自分にとって尊く親しい。だから天主を崇敬する三つの誡の次に、第四誡の父母を孝敬することがあるのである。[17]

最後にフェルディナンド・フェルビースト（中国名は南懐仁、一六二三～一六八八）の『教要序論』（一六七〇）を見ることにする。この書は「聖教の要端」[18]を順序立て、全ての人が解るように簡明平易に説いたもので、口語的表現を用いた点に特徴が見られる。十誡総論の最後には次のように記している。

〔十誡は〕信者だけが守るべきというのではなく、朝廷から庶民に至るまで世の中の人々すべてが共に守るべきことである。もしこの十誡を犯すならば、天理に違背し、本心・良知良能を喪失することになる。[19]

ここでは天理・本心・良知といった朱子学や陽明学の重要概念を巧みに用いて、十誡の普遍性が説かれている。

以上見てきたように、十誡は明末清初の天主教伝道の中で様々に工夫された形で説かれている。人間の行為の根本規範として、教えの中心として伝えられていったが、一貫して十誡が「天主を愛敬する」ことと「自分のように他者を愛すること」の統合として、またその故に教理全体を包括するものとして捉えられていたことが解る。では、なぜ十誡はこの「二つの愛」の統合として説かれているのか。そこにどのような意味があるのか。もう一度キリスト教の原点に戻って考えてみることにする。

四

「福音書」[20]によれば、イエスが教え（聖書では「福音」とある）を説き、病気の癒しを行なっている所に必ずと言ってよいほど登場するのが「律法学者」や「ファリサイ派の人々」である。律法学者はモーセ以来の律法を研究し解釈して人々に教える教師のことで、多くはユダヤ教の一派であるファリサイ派に属していたとされる。彼らは厳格な律法遵守を要求しており、そのためイエスの説くこと、行なうことと激しく衝突することになる。例えば、イエスが安息日（ユダヤ教では土曜日）に病気を癒すのを見て、律法に違反するものだと訴えようとし、[21]イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をするのを批判している。[22]また、イエスが病人に対して「あなたの罪は赦される」と言ったことを取り上げ、神を冒瀆するものであるとみなしている。[23]イエスの行為が十誡を基盤とした律法にことごとく違反するものだと捉えているのである。これに対してイエスは、「安息日に律法で許されているのは、善を行なうことか、悪を行なうことか。命を救うことか、殺すことか」[24]と切り返し、「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」[25]と彼らの批判を退けている。律法の遵守に拘泥する余り、律法本来の意味を見失っているとして、イエスは彼らに向かって「外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている」[26]と逆に痛撃を加えている。このようにイエスは律法主義との対決を明確に表しているが、律法そのものに対してはどのように考えていたのであろうか。

イエスは「山上の説教」（「マタイ」五～七章）の中で、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」[27]と説いている。「律法の完成」とはどういう意味であろうか。「マタイ」によれば、ある時、律法の専門家が「律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねたのに対して、イエスは次のように答えている。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。[28]

この「第一の掟」とは、『旧約聖書』の「申命記」六章四〜五節の「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」を指しており、「第二の掟」とは、同じく「レビ記」十九章十八節の「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」を指している。また「ルカ」によれば、「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるか」と尋ねた律法学者が、逆にイエスに「律法には何と書いてあるか」と問われ、先の二つの掟をもって答えている。[29] これに対してイエスは「それを実行しなさい」と言い、「善きサマリア人」のたとえ話を語っている。[30] イエスはこのように律法全体が「神を愛する」ことと「隣人を愛する」ことに含まれるとし、何よりもその愛の実践を説いている。言い換えれば、律法の細かい規定もそれに対する解釈や遵守も、この「愛」を基盤としてすべてが問い直されることになる。これが、イエスの言う「律法を完成する」ことの意味であった。「ヨハネ」によれば、「最後の晩餐」においてイエスは弟子たちに次のように告げる。

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。[31]

十誡を基盤とする律法を「互いに愛する」ことに絞りあげていくこの考えは、やがてイエスの教えを広く伝道し理論的にも発展させていった使徒パウロにおいて更に強調される。パウロは次のように述べている。

互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は律法を全うしているのです。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから愛は律法を全うするものです。[32]

イエスは「わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される」[33]と説いたが、パウロは、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」[34]と告白している。

このように見てくると、十誡に始まるユダヤ教の掟と律法が、イエスの示した「愛」の掟とキリスト・イエスに対する信仰へと昇華したところにキリスト教の原点があったと言える。十誡を「神を愛する」と「自分のように他人を愛する」こととして捉え、「愛」によって統合する考えはこれに基づくものであった。[35] このように十誡が捉えられた

時に、それは教理の本質をなすものとして位置付けられるのである。明末清初における十誡の伝達も以上のような流れの中から出てきたものであることが解る。では、これに対し中国の士太夫たちはどのように十誡を受けとめたのであろうか。

五

明末天主教における三柱石の一人徐光啓（一五六二～一六三三）は「造物主垂象略説」（一六一五年）の中で、次のように再三にわたって十誡に言及している。[36]

世の中の人は概ね皆〔人を悪に誘う〕三つの仇（肉体、世俗、悪魔）に引き込まれて地獄に堕ち、天主が人を造った聖意（みこころ）に背かないことがない。そこで昔、天主は十誡を降して人々にこれを守らせ、三つの仇に引き込まれないようにした。もし人が本当に十誡をしっかり守り、背くことがなければ、必ず三つの仇に引き込まれることなく、地獄に堕ちることを免れて天国に昇ることができる。[37]

また、同じく三柱石の一人楊廷筠（一五五七～一六二七）は、十誡に対して深い関心を寄せていたようで、[38]『西学十誡註解』という著述があったと伝えられるが、[39]現存はしていない。ただ彼の『天釈明弁』は、仏教の説を天主教を剽窃したものであるとして批判した書物であるが、その中に十誡各条からの引用が多く見られる。たとえば次のようにある。[40]

第二誡は「天主の聖名を呼びて以て虚誓を発する毋れ」で、第八誡は「妄證する毋れ」である。前の誡は天を敬することで、誠実に天主に事え、一言も上帝を欺かないことを求めており、後の誡は人を愛することで、誠実に人に対し、一言も同類を欺かないことを求めている。[41]（「巧言綺語戒」）

楊廷筠は、前出の艾儒略著『滌罪正規』の序文（「滌罪正規小引」）の中でも、次のように十誡に言及している。

『解罪説』（滌罪正規）四巻は人の心情の変化を窮めようとして煩瑣を厭わないが、根本は十誡を越えるものではない。十誡は天主を敬することと人を愛することの二つに尽きる。天主を敬することの内実はまた人を愛する

ことにある。人を自分のように愛することは天主を敬するための方法である。この十誡を統合するのに根本があり、これを行なうのに要点があり、帰一しないことはない。この世の中で、これ以上簡易なものはない。[42]

明末清初に寧波で活躍した天主教徒朱宗元[43]は、陽瑪諾の『天主聖教十誡直詮』に寄せた「十誡序」の中で、「〔天主教の〕書籍は何千何万と豊富にあるが、行なうべきことは十誡を越えるものではない」[44]と述べている。また「答客問」の中で、「十誡を明らかにして心を落ち着けて固くこれを守り、その後で天主が定めた礼儀（秘蹟）を遵行する」[45]と述べ、七つの秘蹟の一つである「告解」に触れたところで、次のように記している。

だから、朝起きたならば天主に一晩守り助けてくれた恵みを感謝し、今日もよこしまな思いや言葉や行ないがなく、十誡に遵わせてくれるようその恩寵を祈る。夜床に臥す時に、天主に一日守り助けてくれた恵みを感謝し、今日言ったこと思ったこと行なったことが十誡に背くものでなかったことを心の中で見きわめたならば、その功を天主に帰し、さらに、日々新たにしてくれるようその助けを請い願う。もし〔十誡を〕犯していたならば、心から痛み悔やみ、以後必ず改めることを誓い、天主の赦しを切に願い求める。[46]

以上のように、十誡は中国人天主教徒の間で天主教教理と日々の信仰実践において重要な意味を持つものとして明確に認識されていたことが解る。また、特に楊廷筠は十誡の内容を「天主を愛し人を愛する」ものであると捉えている。十誡を通して天主教の「愛」の思想を受容しようとする姿勢が窺える。天主教思想の本質が「愛天主愛人」の語によって端的に捉えられていると言える。ところで、前述のように「天主十誡解略」では、この「愛天主愛人」を「仁」という言葉で捉えていたが、実はこの考えは既にマテオ・リッチの中に見ることができる。

六

『天主実義』第七篇でリッチは、天主によって本来的に付与された「性の善」（良善）と自己が後天的に習得する「徳の善」（習善）とを先ず区別し、次のように論じる。人の「性」とは、「理を推論する」働きであり、所謂霊魂である。霊魂は三つの機能を持つ。「記含」（記憶）「明悟」（理性）「愛欲」（意志）をそれぞれ司る。記憶され

たことがらについて、その是非善悪が識別され、善を好み求め悪を憎み嫌うのである。ここでリッチは「明悟」の機能を「義」とし、「愛欲」の機能を「仁」と捉える。更に、仁と義は一方を廃することはできないが、仁は義の精髄であるから、「君子の学は仁を主と為す」ものである。仁は善を愛求する心であるから、学の目的は「自己を完成し天主の意志に合致する」ことである。「天主のためにする」ことが「自己を完成する」ことであり、善を行なうための方法は「先に悪を去って後に善を為す」ものである。悪の根を断ち切るには省察と改悛が必要である。このように心を洗い清めて徳を習得すべきである。その徳の綱要は「仁」に他ならない。リッチは以上のように自己完成の学の要点を「仁」に絞り込み、次のように説く。

そもそも仁について説くならば、二つの言葉によって要約することができる。〔一つは〕天主を愛することで、この上もない天主のためにすることであり、天主のためにする者は自分のように他人を愛する〔これがもう一つのことである〕。この二つのことを行なえば、百行はすべて備わるのである。しかし、この二つは実は一つのことに他ならない。篤く他人を愛すれば、その〔相手が〕愛するものをも愛するのである。天主は人を愛する。私が真実に天主を愛するならば、他人を愛さないことがあろうか。これが仁の徳が尊い理由である。それが尊いのは他でもなく、上帝によるものだからである。(47)

このようにリッチは、仁が「天主を愛する」ことと「自分のように他人を愛する」こととに尽きると説いている。リッチはここで「仁」の概念を取り上げることによって、天主教と儒教との一つの接点を見いだしていると言える。彼は「報告書」の中で、儒教の目的は「王国の平和と安泰であり、家庭や個人を正しく治めることにある。それについては実にすぐれた考えが提示され、そのいずれもが自然の光と普遍的な真理にかなっている」とみなし、次のように述べている。(48)

どの書物を見ても、他人からしてほしいと思うことを他人にもせよ、という愛の第二の掟を説いたものが実に多い。

リッチは仁の概念について、『天主実義』第五篇では『論語』公冶長篇の言葉に基づいて「仁の規範は、他人が自分に対して加えてほしくないことは、自分も他人に対して加えようとしない、ということに他ならない」(49)と言い、第

六編では衛霊公篇の言葉に基づいて「仁の方法は、自分に対してしてほしくないことは、他人に対しても行なわない、ということだ」[50]と説いている。「報告書」に見える「他人から…」という言葉は、「マタイ」七章十二節に「これこそ律法と預言者である」として説かれているイエスの言葉であり、「という愛の第二の掟」とあるのは、既に見た「隣人を自分のように愛しなさい」という「旧約」に基づく言葉を重ねあわせて表現したものである。リッチは『論語』の言葉を「仁の規範」「仁の方法」と捉え、これらのイエスの教えと同様の考えとして捉えているのである。

以上のように見てくると、リッチは儒教で説く「仁」を「自分のように他人を愛せよ」という教えと相い通じる考え方であるとみなしていたと言える。彼は既に『天主実義』第二篇の中で、唯一絶対の尊大なるものとして「我々の天主は古代の経書で上帝と呼ばれているものです」と述べ、儒教の上帝（天）に対する崇敬が天主教の天主に対する敬愛と相い通じるものであると考えている。[51]つまり、リッチは「天主を愛する」と「他人を愛する」という「愛」の本質において、儒教との接点が存在することを、「仁」の言葉によっても示したのである。このようなイエズス会士の説を中国の奉教士人はどのように捉えていたか、二例を挙げてみよう。清初、楊光先の天主教攻撃の標的にもなった李祖白は、羅雅谷の『愛矜行詮』（一六三三）に寄せた序文の中で、次のように述べている。[52]

私は西方の君子から教えを受けて何年にもなる。その教えは、道理に勝れ真実なるもので、その大旨は仁に集約される。仁は二つの流れに分かれる。一つは、天主を万物にも増して愛すること、もう一つは、他人を自分のように愛することで、この二つの流れは、また一つの源に集まる。必ず他人を愛してこそ天主を愛することができる。[53]

また、王徵は『仁会約』（一六三四）の自序の中で、次のように述べている。[54]

そもそも西方の学者が伝えた天主の教えは、道理に勝れ真実なるもので、その大旨はすべて仁に他ならない。仁には愛の二つの働らきがある。一つは、一なる天主を万物にも増して愛すること、もう一つは、他人を自分のように愛することである。真に天命を畏れる者は、自然に天主を愛する。真に天主を愛することができる者は、自然に人を愛することができる。しかし、必ず真実に他人の心を尽くす功ができてこそ、真に天主を愛することができる。思うに、天主はもとより我々の偉大な父母であり、他人を愛する仁の心こそが重要な第一義のことであ

る。[55]

このように見てくると、十誡によって示された二本の柱、「愛天主」「愛人」は、中国人儒教徒と天主教とを結ぶ際に極めて重要な役割をなすものであったと言える。明末清初の天主教伝道とその受容の歴史において、十誡が果たした最も大きな意味は実にこの点にあったと言うべきではなかろうか。

七

以上検討してきたように、明末清初において十誡は天主教倫理の中心をなすものとして伝えられ、受容された。その際、「愛天主・愛人」の思想を示すものとして捉えられ、両者の緊密な相関・統合こそがテーマであったと言える。更に、「愛天主・愛人」は「仁」として説かれ、また受容されるが、「愛」と「仁」の出会いの場が十誡の受容の中に存在した。それは、「キリスト教倫理をひたすら儒教倫理との近似性において評価する意識の強かった」ということではなく、十誡の受容を通して、中国士人の中で天主教の「愛」と儒教の「仁」との対話をなす基盤が作られていったということではないか。本稿では詳しく見ることができなかったが、十誡の第四誡「孝敬父母」も、「唯一神に対する信仰と忠孝倫理との対決の場」としてではなく、「愛天主」と「愛人」を結ぶものとして位置付けられ捉えられていたといえる。天主教と儒教倫理を対立的にとらえるのではなく、「愛」という包摂の場において捉えるところに、天主教を自己のうちに受け入れていった中国人士大夫たちの姿があったのではないだろうか。明末に始まる天主教伝道においては、天主が唯一絶対の創造者・主宰者として、単に服従すべき他者として説かれるのではなく、天主の人間に対する「愛」を根底にして、天主と人、人と人が、「愛する」という行為によって結ばれるものとして説かれたところに大きな意味が存在したのである。十誡の伝達―受容は、まさにその要をなすものであったと言えよう。紙幅の都合で取り上げることができなかった十誡の個々の倫理的問題や「愛」の内容については別稿で論ずることとしたい。

〔注〕

(1) 『天主教要』と『天主実義』のそれぞれの成立事情と両者の関係については、拙稿「『天主実義』の成立」（「哲学年報」第五十一輯、一九九二年）を参照。

(2) 今日一般には「十戒」と表記するが、本稿では明清期の天主教書の表記に従い「十誡」とする。

(3) 『明清思想とキリスト教』（研文出版、一九七九）所収。初出は一九五五年。

(4) 以下、『旧約聖書』及び『新約聖書』からの引用は日本聖書協会発行の『聖書』新共同訳（共同訳聖書実行委員会編、一九八七）による。

(5) 現代中国の天主教会で用いられている「十誡」も、第三誡「守瞻礼之日」が「守瞻礼主日」となっている外は『天主聖教十誡直詮』と全く同文である。

(6) リッチの「報告書」第二の書、第三章を参照。リッチの「報告書」とは、イエズス会士パスクワーレ・M・デリーアによって編纂された『リッチ史料』（FONTI RICCIANE）第一巻（一九四二）、第二・三巻（一九四九）を指す。本稿では、その邦訳である『中国キリスト教布教史一・二』（川名公平・矢沢利彦訳、「大航海時代叢書」第II期8・9、岩波書店、一九八二・一九八三）による。

(7) リッチの「報告書」第二の書、第四章（一七七頁）を参照。「祖伝天主十誡」はイエズス会ローマ文書館所蔵。本文は次の通り。

一　要誠心奉敬一位天主、不可祭拝別等神像
二　毋呼請天主名字而虚発誓願
三　当礼拝之日禁止工夫、謁寺誦経礼拝天主
四　当孝親敬長
五　莫乱法殺人
六　莫行淫邪穢等事
七　戒偸盗諸情
八　戒讒謗是非
九　戒恋慕他人妻子
十　莫冒貪非義財物

(8) リッチの「報告書」第二の書、第四章（一七八頁）。

(9) 『天主実録』については、福島仁氏「『新編天主実録』とその改訂に関する資料の問題」（「名古屋大学文学部研究論集」哲学33、一九八七）を参照。原刻本（『新編天主実録』一五八四年刊）と改訂重刻本（『天主聖教実録』一六四〇年前後刊）とでは、十誡の訳文にも違いが見られる。方豪著『中国天主教史人物伝』第一冊（香港公教真理学会出版、一九七〇）六十九頁に対照されている。以下、原刻本の表記による。

(10) 前有愛天主万有之上三条、後有愛人如己七条、名曰十誡。凡人守此十誡者、自能得天主之寵愛。（第十章）

(11) リッチの「報告書」第五の書、第二章（『中国キリスト教史・二』一九頁）の注（4）を参照。

(12) 其一石、刻前三誡、教人以心言行三者為操柄而愛敬天主。其一石、刻後七誡、教人以心言行和睦同類不害其身名財等為操柄而推広愛天主之心以愛人。蓋天主之教、以仁為本、用此二愛乃為克尽耳。

(13) 『滌罪正規』の刊年は未詳だが、この書には楊廷筠の「小引」があり、艾儒略が一六二〇年に杭州に入った後のものと考えられる。楊廷筠は一六二七年に没しているので、一六二〇年から一六二七年の間に著されたと推定される。

(14) 夫人罪端雖多、皆属以念以言以行以缺、違背天主十誡。十誡者天地真主之命、万理之紀綱、人所共繇之大道也。欲図全改其過、必加察於此而後可。

(15) 愛世間一切諸事物、過於愛天主者、有罪。

(16) 父母有過失、不行苦勧者、有罪。

(17) 天主降十誡于天下、以定上下内外之礼。上有天主、当敬之。下有人民、当愛之。上下以正礼相待、其功必成、而徳必全矣。第一第二第三誡、係于欽崇天主。（中略）其余七誡、俱属愛人如己、而人之内、父母極尊極親于我。故敬天主三誡以後、有第四誡孝敬父母。

(18) 例えば十誡総論の中で次のように記している。
我們要升天堂享無窮福楽、必須先行天堂道路。就是天主所立的十誡。十誡者、不過是教人事事為善、如口中言語、心中意念、并一切身行之事、件件都要合于天理、才算不背天主的命令。

(19) 不但奉教人該遵守、凡天下自朝廷至庶民、人人俱該遵守。若犯此十誡、即是違悖天理、即喪失本心良知良能矣。

(20) 『新約聖書』には「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」の四福音書が含まれる。本稿では、全体を指す場合には「福音書」と、個別に指す場合には「マタイ」のように略称する。引用は、同様の記事が複数の福音書に出てくる場合でも一ヶ所のみを示した。

(21) マルコ三章二節。

(22) 同二章十六節。
(23) 同二章七節。
(24) 同三章四節。
(25) 同二章十七節。
(26) マタイ二十三章二十八節。
(27) 同五章十七節。
(28) 同二十二章三十四～四十節。
(29) ルカ十章二十五～二十七節。
(30) 同十章二十八～三十七節。
(31) ヨハネ十三章三十四節。
(32) ローマの信徒への手紙十三章八～十節。また同十三章十三～十四節、ガラテヤの信徒への手紙5章十三～十四節を参照。
(33) ヨハネ十四章二十一節。
(34) ガラテヤの信徒への手紙二章十六節。
(35) 一五四五年から一五六三年まで開かれたトリエント公会議後に作られ、一五六六年に出版された所謂『ローマ公教要理』の第五章には、「前者（前三誡）は神つまり目的に関する掟であり、後者（後七誡）は隣人に対する愛を教えている。この隣人愛を押し進めていくと、その究極つまり原因である神に到達する。そのため主キリストは、神に対する愛の掟と隣人に対する愛の掟は互いに似ているとおおせられた」とある。
(36) 『天主教東伝文献三編』（台湾学生書局「中国史学叢書」）第二冊所収。文中に「天主降生于一千六百一十五年之前」とあることから、一六一五年（万暦四十三年）に著されたことが解る。なおこの書に対して楊廷筠が著した識語については、福島仁氏「明末の天主教における図像の問題―ヴァチカン図書館天主教関係調査ノート―」（「汲古」第八号、一九八五）を参照。また、徐光啓は「十誡箴贊」という文章を著している（『増訂徐文定公集』巻一、台湾中華書局、一九六二）。
(37) 世人亦大概都被三仇引去入了地獄、豈不辜負了天主生人的聖意。所以古時天主降下十戒来使人遵守、使人不被這三仇引誘去。若人真能守定十誡、無所干犯者、必定不被三仇引去、必定可升天堂免堕地獄也。
(38) 楊廷筠については、拙稿「楊廷筠の思想形成に関する一考察―明末一天主教徒の人間観―」（「中国哲学論集」第12号、一九八六）を参照。
(39) 丁志麟の「楊淇園先生超性事蹟」に見える。なお、葉向高の「西学十誡初解序」（一六二四、『蒼霞餘草』巻五）は、楊廷筠

の著述に寄せた序文である。詳しくは注(38)所掲拙稿の注(12)を参照。また、葉向高と天主教との関係については、拙稿「首善書院の光と陰」(「哲学年報」第四十九輯、一九九〇)を参照。

(40) 『天主教東伝文献続編』(台湾学生書局「中国史学叢書」)第一冊所収。「世尊」に第一誡、「殺戒」に第五誡、「盗戒」に第七誡・第十誡、「淫戒」に第六誡・第九誡、「巧言綺語戒」に第二誡・第八誡、「四恩」に第一誡・第四誡が、それぞれ引用されている。第三誡以外はすべて取り上げられていることになる。

(41) 二誡毋呼天主聖名以発虚誓、第八誡毋妄證。前誡是敬天事、要人以実心事天主、不敢一言欺上帝也。後誡是愛人事、要人以実心対人、不敢一言欺同類也。

(42) 解罪説四巻、欲窮人情変態、不嫌称繁、而大指不踰十誡。十誡尽於敬天主愛人二端。敬天主之実、又在愛人。愛人如己、乃所以敬天主。統之有宗、執之有要、未嘗不帰於一、而天下之易簡、無過此矣。

(43) 朱宗元については、方豪著『中国天主教史人物伝』第二冊(香港公教真理学会出版、一九七〇)を参照。浙江鄞県出身の朱宗元は順治五年(一六四八)の挙人であり、方氏の推定によれば万暦三十七年(一六〇九)の生まれである。また、朱宗元については、岡本さえ氏「朱宗元《拯世略説》について」(昭和62年度科研費「イエズス会士関係著訳書の基礎的研究」研究成果報告書、代表者吉田忠、一九八八)を参照。

(44) 載籍之富、斯万斯千、惟所当行、不踰十誡。

(45) 講明十誡而定心固守之、然後遵行天主所定礼儀。

(46) 是故旦而興也、則謝上主一夜庇祐之恩、而祈其寵綏使我今日無妄念言行而克遵乎十誡。夕将臥也、謝上主一日庇祐之恩、而黙察此日之所言所思所行果不犯十誡、則帰功天主、更冀厥佑使我日新又新。若有所犯、則誠心痛悔、誓後必改、哀求主赦。

(47) 夫仁之説、可約而以二言窮之。曰、愛天主為天主無以尚、而為天主者愛人如己也。行斯二者、百行全備矣。然二亦一而已。篤愛人、則并愛其所愛者矣。天主愛人、吾真愛天主者、有不愛人者乎。此仁之徳、所以為尊。其尊非他乃因上帝。

(48) リッチの「報告書」第一の書、第10章(『中国キリスト教布教史一』一三〇頁)。

(49) 仁之範、惟言無欲人加諸我、我勿欲加諸人耳。公冶長篇には子貢の言葉として「我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人」とある。朱子は「此れ仁者の事なり」と解釈している。(『論語集註』公冶長篇)

(50) 仁之方、曰不欲諸己、勿加諸人。衛霊公篇には孔子の言葉として「己所不欲、勿施於人」とある。(この言葉は顔淵篇にも見える。)朱子は「孔子、告ぐるに仁を求むるの方を以てするなり」と解釈している。(『論語集註』衛霊公篇)

(51) 拙稿「天主教と朱子学―『天主実義』第二編を中心にして―」(「哲学年報」第五十二輯、一九九三年)を参照。

(52) 李祖白(〜一六七一)はアダム・シャール(湯若望、一五九一〜一六六六)の教えを受けて欽天監夏官正を務め、『天学傳概』

を著わす。李祖白については、方豪著『中国天主教史人物伝』第二冊（香港公教真理学会出版、一九七〇）を参照。

(53) 余奉教於西君子有年矣。其為教也、理超義実、而大旨則総於仁。仁分二支。一、愛天主万有之上、一、愛人如己、二支又匯為一原。必克愛厥人、始克愛厥主。

(54) 王徴（一五七一～一六四四）は『奇器図説』『崇一堂日記随筆』（筆録）『畏天愛人極論』等を著わす。王徴については、方豪著『中国天主教史人物伝』第一冊（香港公教真理学会出版、一九七〇）を参照。

(55) 夫西儒所伝天主之教、理超義実、大旨総是一仁。仁之用愛有二。一、愛一天主万物之上、一、愛人如己。真知畏天命者、自然愛天主。真能愛天主、自然能愛人。然必真真実実、能尽人之心之功、方是真能愛天主。蓋天主原吾人大父母、愛人之仁、乃其喫緊第一義也。